

## 正倉院展、唐代を想う

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

今年も正倉院展が開催されます。66回を数えます。奈良国立博物館で10月24日～11月12日まで。今年は、樹下に天平美人を描いた「鳥毛立女屏風」や西アジアからシルクロードを經由して運ばれたと思われる「白瑠璃瓶」など59点が展示されます。

「鳥毛立女屏風」は日本で制作されたものですが、唐の最新ファッションや風俗が描かれています。日本で描かれたそうですが、最新ファッションなどを誰がどうやって伝えたのでしょうか。推理も楽しめます。古代の日中交流に強い関心を持っていた

私は、現役時代に数回、正倉院展だけを見るために奈良へ行った記憶があります。

正倉院御物といえばやはり遣唐使。はるか昔に文化を求めて荒海を渡った遣唐使のロマンが、私の留学志向のエネルギーとなりました。向かった先はアメリカでしたが、それはともかく、大好きな唐への思いを述べてみたいと思います。最近、「つんどく」のなかから「大唐帝国(宮崎市定著)」を読み返してみましたが、唐の実態は日本で思い描かれている唐とはまったく異なる姿が浮かび上がってきます。

618年に李淵(高祖)が隋を滅ぼして成立し、907年に朱全忠に滅ぼされるまでの289年間の唐の歴史は、国の内部においては内紛が続く汚辱に満ちていましたが、外に向かつては国威を発揚していました。現代中国同様「内面・外面」の違いに仰天します。ほんの断片ですが驚きの部分を述べてみたいと思います。

### “華麗な”唐王朝の内面は？

歴史上「唯一の女帝」則天武后。2代皇帝太宗の後宮に武氏という美女がおり、太宗の死後、尼に

なっていたのを3代皇帝の高宗が見初めて後宮に迎え、つぎに正皇后の王氏を廃して皇后にしてしまいました。

高宗は生まれつき、賢くなく、病身で頭痛もち。政務の決済などは、しだいに武后が行うようになり、代理であった武后はやがて権力の虜になってしまいました。それからは権力維持のために手当たりしだいの殺戮が始まります。前皇后の王氏はもとより、高祖、高宗の一族は皆殺し。そればかりでなく自身の子にも迫害を加えました。実子の李弘や李賢も薬殺。高宗が死んで天子についた中宗(李哲)を3か月でクビ。次にはやはり武后の子・李旦を立て、睿宗としました。

その頃は仏教が広まっていた時代。僧の法明なるものがゴマをすり、「武后は、救世主弥勒仏の生まれ変わりだから、天下の主となるべし」と説きました。そこですぐさま睿宗を廃して自ら皇帝になってしまいました。690年のことです。

武后が皇帝になるにあたって行われた大量の殺害は、唐の王室外戚が数百人、大臣数百家に及んだそうです。従来より、新王朝ができるとき、前王朝に貢献した一族や功臣は邪魔者扱いして排除するのが通例ですが、武后の処置は無謀といわねばなりません。しかしこの大量殺戮が、後に政界を粛清したという評価になります。武后は81歳で死にますが、在位は15年に及びました。さすがの豪傑武后もよる年波には勝てず、宰相の意見に従って遠方に流しおいた中宗を呼び寄せ後継者に指名しましたが、中宗は妻の韋皇后に毒殺されます。

韋皇后の一族が勢力を伸ばすことを危惧した睿宗の子である李隆基が立ちあがり韋一族を殺戮しました。その後睿宗が復位し、李隆基は皇太子となり、712年玄宗皇帝が誕生します。

玄宗は在位45年に及びますが、そのうちの最初の30年間はまさに平穩の時代。天下泰平で実績を記すことがほとんどありません。その理由は則天武后によって粛清された大方の旧勢力の残党がほとんど残っていなかったせいです。唐の王室はまったく新しく生まれ変わったのです。

## 唐王朝の対外事情

まず、日本との関係に触れてみます。玄宗皇帝の時代に、遣唐使は3回派遣されています。

第9回(僧玄昉、阿部仲麻呂、吉備真備など)・第10回・第12回(鑑真来日)(11回は停止)です。玄宗は、特に高僧の鑑真和上の渡航には大反対で、妨害したとも言われています。阿部仲麻呂は科挙に合格。唐の高官として仕え、玄宗には特別評価されて唐に永住しました。

一方、地続きの大陸では、モハメッドが7世紀にイスラム(サラセン帝国)を立ち上げ、その勢力を東西に伸ばし始め、ペルシャの貴族や富豪はシルク・ロードを伝って中国まで逃げ延び、唐の領土を安住の地と定めました。彼らは中国人に同化して商業資本家として活躍しました。

唐の経済面では、かつて西アジアから学んだ陶器は「唐三彩」を生み出すなど、西との交易に影響を与えました。文化面では李白や杜甫、白楽天が活躍します。宗教では玄奘三蔵がインド・西域で仏教を学び帰国します。

政治・経済・文化で安定した玄宗の時代も晩年は、いささか情けない15年でした。在位が長くマンネリ化し、蓄積が豊富になると、人間はいつしか遊惰安逸に流れます。隋の煬帝そこのけの奢侈を好む凡庸君主に成り下がってしまいました。玄宗は自分の息子の嫁を取り上げて後宮に入れてしまいます。それがかの楊貴妃です。

楊貴妃は絶世の美人といわれていますが、さらに大変官能的でした。玄宗は楊貴妃を伴ってしばしば温泉に行ったそうです。白楽天は詩に歌っています。「温泉水滑洗凝脂＝温泉の水滑らかにして玉肌を洗う」と詠じました。この時代の詩人は、西欧の宮廷画家(お抱え絵師)のようだと宮崎氏は指摘しています。未曾有の経済力を誇る唐にはシルク・ロードを通じて東西文化交流の最盛期を築いていました。

## 斜陽化する唐王朝

やがて玄宗の唐は崩壊の道をたどり始めます。まず周辺諸国が活発になります。北の外モンゴルではウイグルが突厥を併合。西のチベットでは吐

藩が強盛となり、南の雲南では南詔が独立して大国になってきました。唐は包囲されてしまったのです。

西アジアではサラセンのウマイヤ王朝を倒して、アッパース王朝が興り新疆省内の唐の属国に侵攻してきました。751年、唐は7万5千の大軍を送りましたが惨敗。ほとんどの兵が捕虜になりました。中国の製紙技術が西アジアに伝わりましたが、この戦いで捕虜になった兵が技術を教えたそうです。

その4年後に有名な「安祿山の乱」が起きます。反乱軍の将兵はチベットや西方イラン系、北方遊牧民出身の異国人が多く、中国人に対しては情け容赦ありません。中原一帯は荒れ狂い、修羅場となりました。

攻撃目標は大都市でしたから、洛陽はたちまち陥落。賊軍が長安に向かうと玄宗は周章狼狽して、蜀を目指して都落ちします。この時、楊貴妃は殺されてしまいます。やがて玄宗は甘粛省の節度使(地方軍の司令官)の郭子儀によって上皇に棚上げされ、皇太子を即位させて肅宗が誕生します。

郭子儀は契丹人やウイグル人の援軍を得て安祿山の軍を破りました。763年のことです。安祿山の乱のような大乱を経ると、たいていの王朝は滅亡に向かうのですが、唐王朝はその後150年も生き延びます。

その理由は国家としての形態を変質させたからです。武力国家から財政国家への変身です。何にも勝るのは経済力、武力が必要なら「金で買え」です。金さえあれば何でもできるという現代に通じる発想が生まれました。以上は唐の歴史のほんの一端ですが、いずれ本欄で続きを書きたいと思います。

多くの中国人が正倉院展を見れば、失われた過去の中国の歴史に驚嘆し、それらを今日まで保存してきた日本人に感謝すると信じています。

